

女	一七	一九	二〇	二五	二〇	一八〇
平均	一六	一八	二二	二四	一九	一八
						二〇

此の如き昇降は何を意味すか。青年の抽象概括力の發達は、よく神の能力を抽象して茲に全知全能の形式を構成するに至るは事實なれども、而も十六歳以前に於ては蓋然約抽象の勢過大なる爲め、あらゆるの場合を包括して抽象する事能はず、從つて其の抽象は尙早的抽象たるを免れず。故に青年の初期に於て、神の或能力に驚嘆する事あるや、直に此れより尙早的抽象をなして、此處に神の全知全能を肯定するに至れるも、彼の抽象力漸次精に入り、密に進むや、茲に幾多の疑問を生じ、遲疑逡巡遂に五里霧中に彷徨するに至るもの少なからず。從つて其の歩合を減じ、此れと同時に否定不明等の歩合を増す所以を闡明にし得るなり。されば其の判断の形式は蓋然的よりして確言的に進むは當然の事なりとす。例へば「神や佛はどんな不思議な事をしますか」といふ問に對し

女十三「自分が思つて居ることをいひます」といつかには思つて居ることが出来る(蓋然的)

男十五「神佛は何處でも萬物の所爲を見て、其れ相當に處理するのであります」

(中間)

男十八「人の知り得ないと思つた事でもきつと神は知り、其儘には決して捨て、置きません」(確言的)

の如きは其の一斑を示すものなり。されば神の全知全能なる屬性は、青年の發達と共に初めは其の強度を増し、次には其の明瞭の度を増すものといふを得べきか。

三、博愛的 兒童は神の能力の一として慈惠を數ふるもの其の全數の二割二分に當れり。而して此の時代に於ては、神は希望に應じて各兒童に利益を與へ、物品を給し、又は其他の快樂を供給せしなり。然るに青年期に入りては、漸次其の發表を變化して著しく公衆的色彩を帯び、彼の屬する團體に對し、或は國家に對し、或は社會に對して、一般に利益を與ふるものなり。而已ならず又其の與へんとする利益も、物質的肉感的にあらずして、漸次精神的の分子を多く加へ、遂には人類の幸福享樂に關する理想を賦與するに至る。次の實例は其の一般的傾向を示すものなり。

女九「折箱がもらへる」。「藥がもらへる」。「御本がもらへる」。(利己的)

男十一「自分の家がだん／＼金がもうかつてくる。己れに幸福がある。自分の病がなほる(利己的)」

女十四「限りない榮えを受けることがあります。心を安くすることが出来るから。(享樂的)」

男十六「一家幸福になります。世界の人士の總べてに慰安を授けられ正道に導かる。(社會享樂的)」

即ち兒童期に於ては、全く利己的に神を理解すれども、漸次利己の分子を離脱して、遂に社會公衆の享樂慰安に心に向くるに至るものなり。故に此れを青年期に卓越せる特徴として博愛的といふも過當にあらざるべし。然れども此れを數量的に示す上に於ては、慈惠的と博愛的との相交替する過程を示す能はず。然れども兒童期の慈惠的に比して著しく平均歩合の少きは、此れ兒童期に盛なりし熱烈なる利己心の衰退著しき上に、之れに代るべき社會公衆的の心未だ充分に發達せず。加ふるに懷疑的色彩著しき爲に、一時減退を示せるによるならんか。神の能力の否定不明等の著しく増加するは、又これが反證にあらざらんか。今其發達の有様を示さん。

性別	年齢		平均
	十三	十四	
男	一〇	一三	一〇
女	一五	一七	一六
平均	一三	一五	一三

此の表によれば、著しく女子に此の傾向の強くして、男子に弱き事實を示す。此れ女子は自己並に一家の幸福を欲し、進んで人類の慰安幸福を求むるの保守的傾向強きによるならんが、トムソン嬢は男女の青年を比較して次の如く言へり。

女子は男子よりは一層慈悲深いけれども、直言直行する事には比較的劣る氣味がある。而して男子よりも一層妄信的で、臆病に陥り易く、且又從順、敬虔、歸依、忠實の特性を持つて居るのである。

女子は男子よりは、比較的兒童に近く、従つて精神上身體上共に、將來の杞憂とか懐舊の情とかに支配せられ易いのである。(Adolescence, Vol. II, p. 566.)

此れ右表の男女の差異を根本的に説明するものにして、此れより神を博愛的に理解するは、青年期女子の特徴なりと斷ずる事を得るなり。

四、安心立命的 兒童期に於て不明なりし安心立命的の觀察は、漸く定形を分出するに至り、此處に神の能力として、此の宗教的屬性を數へしむるに至れり。然れども此の屬性にも亦、其の質の變化なき能はず。即ち初めに於ては、單に現在若くは近き將來に對する懷疑煩悶の満足なるか、然らざれば全く茫漠たる安心なれども、漸次進めば此處に永遠の安心立命を加味するに至るなり。例へば

女十三「自分の心が確になります。氣休めになります。」

男十三「心の持ち方がよくなります。」(以上現在の)

男十五「神佛を頼んだならば神や佛が自分を助けるといふ自信が出来るから、或善事をなす事が出するやうになります(茫然たる安心)」

男十八「無意味質朴なる昔の人等は其苦みを神佛に訴へ其の結果精神上の慰安を與へられ遂に長年の苦みも無くなる如く常に人類に永遠の慰安を與へらるるものと思ひます。(永遠の慰安)」

の如きは、其大體の進程を示すものなり。然らば此の安心立命の思想は年齢によりて如何なる盛衰あるか。勿論數量的の表示は其の質の變化を示すこと能はざる

も、また其の大勢を窺ふに便ならずとせず。

性別	年齢	
	男	女
平均	一〇	一〇
十三	一〇	一〇
十四	一四	一三
十五	一四	一三
十六	七	一〇
十七	二	一〇
十八	三	一〇
平均	二	二

即ち此れに於ては、男女の間に大なる差異を見ず。又年齢の進歩につれて多大の進歩を見ず、僅に其の萌芽を收めて次の壯年期に於ける豫備をなすものにあらざるかを思はしむ。

五、不明と否認 神の能力を疑ひて確然たる判断を下す事能はず、不明の間に彷徨するものは約其の二割に達し、更に進んで神の力を否認するものは、一割五分以上に達す。此の結果は前章論述せる疑惑の發展と頗る相關聯する所あるもの、如し。即ち

内容	年齢	
	男	女
能力肯定	五〇	四七
十三	六九	五九
十四	六三	七七
十五	七六	七六
十六	八〇	七二
十七	六三	六八
十八	六五	六八
平均	六八	六八

能力否認	二〇	二二	二一	一七	一八	一八	一一	一八	一五	一六	一五
不明	三〇	三〇	二〇	一七	二〇	一五	一六	一八	一七	二〇	一八
不											

一八六

の如し。然し茲に注意すべきは、十三、四歳に於ける否認不明の増加は、児童期に非常により多かりし答解不能と相類するものにして直に懷疑の結果より来るものとのみ見る事能はざる事なり。此れ青年初期に於て普通なる彼等の繁瑣を厭ひ、冷静なる反省より逃れんとする結果によるならんか。

以上説く所より神の能力を概括すれば、青年は神に對して道徳的(德)博愛的(愛)救濟的(望)の屬性を附し、而して其知は至らざる限なく、其力は及ばざる物なしとなす。されば尙一層此れを約言すれば青年の神の能力は德愛望の意力なりといふを得べし。茲に於て余は神を以て倫理的實在觀念とするに賛せし斷定に、更に一段の裏書を與へたるものなりと信するなり。然し又其發達を略叙せんか、質に於ては利己的より公共的に、蓋然的より確然的に、直覺的より經驗的に進み、其量に於ては波動的の進歩をなし兩性によりては多少差別的の發達をなすものといふを得べし。此の結論の結果よりして、余は青年の活動には德愛望の意力的發現を認むるを以て順當なる經

過となし、此れに缺くるもの、若くは其の力の薄弱なるものに對しては、其の發達の經路及兩性の關係を考慮して、極力其の陶冶に努めざるべからざるを主張するものなり。而して現今青年の状態を観察せんか、此の點に關しては大に遺憾の點なき能はず。彼等は其の徳の適從する所に惑ひ、相互に相愛するの信念を得る能はず、將た又其居に安んずる所を知らず。殊に遺憾に堪へざるは、其の意力の消耗して退嬰屈從其の信念に向て奮闘猛進する事能はず、果は卑怯卑劣の失敗を重ねる事多き事なり。茲を以てホールをして叫ばしめて曰く「正當なりとの信念より来る怒は、道徳教育上缺ぐべからざるものにして、如何なる侮辱に對しても無抵抗なるは甚しき卑法といはざるべからず。苟も相當の體格を有する男子にして、事に臨み體力を以て戰ふ能はざるものは、殆んど名譽の觀念を有するの資格なきものなり。かゝる男性は、打つも響かざる男性なり。彼の德義は中核に於て腐敗せるものなり」(Adolescence. Vol. I. p. 217.)と。余は此の事實を以て現代青年の信念缺乏、意力消耗の結果なりと斷せざるを得ず。されば目下の急務は、青年に潑刺たる信念を養ひ、横溢せる意力を貯へしめ、此の原動力を利用して彼等の理想に向つて猛進せしめざるべからざる事なり。

彼の英國に於ける、ポイイ、スカウト、ムーグメントの起り、少年に、國民的訓練を、與へ、宗教道徳上の信念を、養ひ、實行を、尙み、敢爲、邁進の氣象を養ひ、軍事的精神の陶冶に資せんとするに至りしも、蓋し故なきにあらざるなり。殊に宗教道徳上の信念養成の上より、實行敢爲の氣象を養はんとするに至りしは、吾人の殊に注意を要する所にして、且又會長バウエル中將の苦心の存する所を窺ふに足ると共に、亦同中將の此れが成功に對する信念の横はる跡を追跡し得て、殊に興味ある事項に屬す尙志同窓會雜誌第七號北條前校長の談)

更に翻つて惡魔の性質及能力を検せんか。神の性質及能力の反面を窺ふを得て表裡相應するを見るなり。既に兒童期に於て述べたるが如く、神を以て善性の投射せられたるものとせば、惡魔は其惡性の投射せられたるものなり。されば神の本體を以て、不可議なるもの、精神「良心」超人「萬有等とせば、惡魔は亦其の反面を現はせるものたらざるべからず。今青年の惡魔の本體を尋究するに、精神に對しては惡心惡行あり、良心に對しては情慾あり、超人に對しては惡超人あり、其萬有を代表するものは、地震天災等を擧ぐ。然れども此處に不可思議に對應するものを缺くは、一見怪訝

に堪へざれども、亦よく考ふれば一理なきにあらず。何となれば血氣動き易き青年の常として、自己に敵意を挾むもの、又は自己を迫害する怨恨の如きは、自己を保護し自己に利益を與ふる感謝よりも、一層深甚なる注意を拂ふは彼の本能性の自然なり。サンフォード、ベル氏の「教師の感化力の研究」に於ても、惡感化は良感化より早く其の威力を逞ふし、且又自己保存の本能は自己擴張より早く發達する旨を結論せり。即ち

“They further show that the period of greatest susceptibility to influences for the evil that comes from this malevolent attitude of the teacher comes earlier than the corresponding susceptibility to influences for good. Naturally, the instinct of self-preservation shown in the rebellious reaction to the teacher's treatment, asserts itself before the instinct of self-seeking.” (The pedagogical seminary, Vol. VII, p. 522-523).

の如し。されば神の本體として、不可思議なるものに對應するものなきも亦不可思議と稱するを得ず。今これを表示すれば次の如し。

内容	年齢性	
	男	女
不明又は否定	十三 四〇	十三 四〇
	十四 四〇	十四 三〇
惡心惡行	十三 二〇	十三 二〇
	十四 二〇	十四 一〇
情慾	十三 一〇	十三 一〇
	十四 三〇	十四 二〇
其他(惡超人、天災、地震等)	十三 三〇	十三 二〇
	十四 一〇	十四 三〇
平均	十三 二七	十三 二九
	十四 二七	十四 二九

無論惡心惡行は、情慾に基因するものなれども、特に神の本體と對應せしむる上に區別せしものなれば、今此れを合併して、惡心又は情慾と稱するも不可なかるべし。されば青年の自覺せる惡魔とは、要するに心の惡方面の代表たるか、若くは彼等の恐怖の對稱となるものたるべく、其後者即ち之を客觀的に外に求むるは、僅に前者の半を過ぐるのみなるより推して考ふれば、神の本體は主として我心の善方面を指示せるものたるべく、其意識明瞭ならざる所より、其大部分は不可思議物として其中間に彷徨せるのみ。斯く考へ來れば、神及惡魔の本體は、主として、我心を指示し、且つ、其の心の善惡兩方面を客觀化せるものなりと斷言するを得べく、其他のものは僅に不可解の經驗傳説若くは傳説譬喩等の固執性より來るものと補足し得るなり。

然らば其の惡魔の能力は如何。兒童期に於ては兒童の慾求と密接の關係を持ち而して其慾求は主として肉感的感覺的なる所より、兒童の惡魔の働きとして理解せるものは、身體的活動慾求の妨碍にてありしなり。然るに覺醒後に於ては、其の活動著しく内向的精神的となる所よりして、其の惡魔も亦常に其の精神的活動の妨碍者として出現するに至る。此處に於て、兒童期に於ける殘忍暴行の如き、身體活動の妨碍を擧ぐるものは、覺醒者には其跡を絶つに至るは當然の結果なりとす。今次に其の統計の結果を表示せんか。

内容	年齢性	
	男	女
神經的苦惱	十三 二二	十三 三〇
	十四 一七	十四 二四
災厄	十三 一七	十三 一〇
	十四 一七	十四 二二
誘惑	十三 八	十三 二二
	十四 一五	十四 一〇
墮落	十三 一七	十三 三〇
	十四 一〇	十四 一〇
不明	十三 二七	十三 一〇
	十四 二八	十四 二八
否定	十三 一〇	十三 一〇
	十四 八	十四 一〇
平均	十三 二二	十三 二八
	十四 二二	十四 二二

此處に注意すべきは、惡魔の能力を精神的に解せしは十歳の兒童にては僅に三割に達せざれども十三歳の覺醒者に於ては六割以上に達す。此れによるも覺醒未覺醒の重要な區別點の、内向的精神的要素にある事を了知するを得べし。

以上の如くなれば余は茲に覺醒後の青年の神と惡魔との能力に關する自覺は、互に其表裡をなすと共に、漸く兒童期に於ける部分的局限的衝動的の關係を離れて、反省的包括的全般的の特徴を有するに至り、知識經驗の進歩發達と精密に一致するものあるを認めしむるなり。

尙終りに覺醒後の青年の奉ずる神及惡魔の數につきて一言せん。兒童に於ては、經驗の擴張すると共に、益々其の數を増加する傾向ある事を斷言せり。然るに覺醒後に於てと、尙十三歳に於て其數を増すも、十四歳よりは俄然其の割合を減じて、遂に十八歳に至りて一人以下に下る。即ち

神	割合
十三	一、八
十四	一、五
十五	一、四
十六	一、三
十七	一、二
十八	〇、七
平均	一、三

の如し。然れども其の理を考ふれば、又説明を加へられざるにしもあらず。

即ち青年の概括的思想の發達は、年齢と共に益々進み、十八歳に於ては殊に急速の發展をなすものある事は前既に述べたり。茲に於て神佛の併合行はれ従つて其の數の減少を來すべきは見易き道理に屬す。加之年齢に伴ひて漸次其の勢を増す懷疑的思想の發展は、神の否定を敢てせしむること少きにあらず。茲に於てか、其の數の減少は當然起り來るべき自然の過程とも稱するを得んか。更に又惡魔の數に至りては、神のそれと殆んど其の歸を一にし、別に詳説するを要せず。されば青年指導上に於ては、孤立的の多くの神を設立せずして、或統一的の精神若くは原理を以てこれを代表せしめ、これに向つて充分の反省熟慮を加へしむるの必要あるべく、従つて兒童期に於けるが如く、無暗に體を作り、象を畫くは、比較的其の重要な度を減するなり。

其三 應報の信仰と教育上の要件

死の觀念——靈魂の有無——靈魂の本體——靈魂の滅不滅——靈魂の行衛——善惡の標準——善惡の應報——地獄極樂の觀念——應報と靈魂——陶冶上の方針

兒童期に於ては、兒童は死の問題を解するに、初めは生理的活動の一局部停止を以て之を説明せんとし、漸次進みては概括的説明の傾向を現はし、尙進みては精神的靈的の説明を加へんとする傾向あるを豫斷せり。然るに今覺醒後に於ける青年の答解を検するに、これを明に證明せるものありといはざるを得ず。

内容	年	齡	十三	十四	十五	十六	十七	十八	平均
生理的	及	及	五八男	五〇男	三五男	三五男	三七男	三五男	四三男
靈言	及	及	四四女	五〇女	五〇女	四一女	四〇女	三〇女	四三女
來世に言及	及	及	二五	三〇	三三	二八	四〇	二八	三五
不明			一七	一〇	二〇	一四	八	一〇	一五

即ち單に生理的物理的の説明を以て、客觀的に此れを證明せんとする者四十三パーセントの多數を占むれども、既に其靈に言及して主觀的説明を加ふるものは、三十二パーセントに達し、更らに一步を進めて、現世的の説明を以て満足せずして、來世に言及せるものは十六パーセントに達す。此處を以て見れば、同じく死を見る事兒童と青年とは大に其の意味を異にし、彼にては感覺的なるに、此れにては叡知的なり。

然し彼と此れとは其度を異にするも、共に現在のなるは大に注意を要する事に屬す。而も精密に其各項の内容を検せんか、各年齢及兩性の間には多くの小動搖ありて、前記の大體の進歩發展の過程に逆波を形成せること少なからず。即ち彼の生理的説明に至つては、兒童期の感覺的外面的の説明と相距る事遠からずして、彼と著しき分化發展の跡を見ず。此の現象は覺醒者の心理としては、頗る怪訝に堪へざるもの、如きも、よく考察すれば、此の時期は反對なる感性と知性との相交替する時期にして、正に其の過渡期とも稱すべし。茲に於て彼此の間に其の動搖あるは、亦理なきにあらず。スタンレー、ホール氏も亦此の兩者の交替現象につきて次の論斷を下せり。

“ We find many cases of signal interest in which there is a distinct reciprocity between sense and intellect, as if each had its nascent period. We have already seen how the senses are acuminated and sense interests modified and generally enhanced, so that occasionally youth is passionately devoted to seeing and hearing new things, is all eye, ear, taste, and would widen the surface of contact with the external world to the maximum, as if laying in stock for future mental elaboration; but there

are also periods of inner absorption and meditation, when reality fades and its very existence is questioned, when the elements that make the content of the sensory shoot together into new unities. The inner eye that sees larger correspondences in time and space is opened; the bearings of familiar facts appear; wisdom is sought from books or friends, and is assimilated with amazing facility, so that a new consciousness is born within or above the old, and the attention is attracted to inner states which demand explanation." (Hall.—Adolescence Vol. II, p. 87—88.)

以上の如くなれば、青年の約半數は死に對して靈的説明を與ふるも、然も其の不滅を豫想して來世的の説明を與ふるは、僅に十六「パーセント」に過ぎず。而も此れを兒童の五「パーセント」に比すれば約三倍に達す。されども本問は死に對しての發問なり、従つて死なる現象を説明せんとして、之れに意識を集注せるの結果、尙一步進みて靈の滅不滅に考を向くる事は困難なり、況んや靈に言及せるものも滅不滅の斷定を與へざるものは、直に滅を信するものと速斷する事能はざるに於てをや。茲に於て、靈魂の滅不滅及性質に關しては、自ら別途の方面より調査せざるを得ず。これが爲には兒童期に於て言明せし如く、これに適せる三個の發問を以て其の關係事項を調

査せんとす。

先づ此の靈の滅不滅を検する前に、靈魂とは如何なるものなるかを檢するも亦無益の事にあらずと信す。前章に於て既に説明せし如く、幼兒にありては其九割九分は全く答ふること能はず。其答ふるものにつきて考ふるも、多くは傳說的、言語的にして心中に何等の内包を浮べざるもの、如く其説明全く神祕的なりしなり。然るに兒童前期に入りては、其答ふるもの、數遙にこれより多きも、其説明具體的物質的の境域を脱せず。然れども兒童後期に入りては、此れに精神的説明を加へんとする傾向あるを論述せり。更に青年の覺醒期以後に於ては、益此の傾向の判明すると共に更に一層精密に根柢的本體を求めんとするの努力ある事を認め得るなり。今其發展の順序を簡叙せんか。

一 不可解のもの 靈魂を以て不可解のものとするは、全數の約三割二分に當り、其の最上位を占む。此れ兒童期に於ける非反省的説明に満足せずして、更に自覺的反省的態度をとらんとするに當り、茲に知識經驗の缺乏よりして、端なくも説明の根據を見出す事能はず、而も感情の肯定は此れを否む事能はず、遂に感情の肯定にして

知識の否定状態たる「不可解」なる状態に陥りたるにあらざるか。例へば

男十七「どんなものだと言ふ譯には行かん」。「口」に言ふ事の出来ないもの。

女十六「天國に行きますが何とも言へないものです」。

の如きは、知力にて此れを證明する事能はざるも而も其の存在は感情的に肯定せるものなり。此處に於てか知る、感情的の肯定は青年に於ける斷定の有力なる根柢をなし、知力も尙此れを左右する事能はざる事あるを。此處に於てホルルの左の立言も眞に其の根柢する所淺からざるを思はしむるなり。

“.....And especially at adolescence, it is chiefly to satisfy the feelings which then and thereafter are three-fourths of the soul and represent the life of the race, while the intellect is chiefly an individual product and therefore more accidental. Four great definitions of education by four of its greatest prophets are that it consists of learning to fear aright, to be angry aright, to pity aright, and to love aright, and thus the instincts and sentiment are tuned to the world without,” (Hall.—Educational Problems. Vol. II. p. 476).

二「心精神」更に尙一步進めば、此の「不可解」なる説明を以てしては知力的満足を得

る事能はず。此處に於ては其の分化は知力的方向に於て進路をとり、遂に靈魂の本質を以て心即ち精神として説明を試むるに至る。従つて其の記載の有様を見るも著しく明晰の度を加へ、其の判斷の形式又確言的のもの多し。例へば

男十六「死んだ後の心であります」。「即ち其物の心」。

女十七「自分の心」。「自分の精神を言ふ」。

の如きこれなり。茲に於てか知る、青年は靈魂の本質を究めて、遂に不可解に陥り、更に一轉して此れを精神即ち心に歸せるを。

三、良心 更に深く其本性を考察せるものは、單に心又は精神にて満足せず、其心の善方面を現はせる良心を以て此れを説明せんとするに至る。されば此處に至りて靈魂は全く道徳的の性質を帯ぶるに至れり。

四、斷片的考察 以上の概括的結論に到達せずして、靈の一部發現のみに注意せしものは、其の一部性を以て全部を蔽ひ、茲に諸種の突飛なる解釋を試むるに至る。例へば「電氣の様なもの」、「忍辱心の固り」、「神の一種」、「慈悲の心」、「神經」、「無色無臭のもの」、「腦髓」等の如きはその代表的の例にして、余は特に此れを靈魂解釋上の變態と見做さんと

欲するものなり。

以上の解釋の外、全く其の存在を否認し、又は其の解釋をなし能はざるもの亦全數の二割に達す。今此等のものゝ年齢的分布を示せば次の如し。

内容	年齢	
	男	女
不可解のもの (精神)	十三	二五
	十四	三三
	十五	二〇
	十六	二五
	十七	二七
	十八	三三
	平均	三〇
	不明及否定	二五
	雜	一七
	其	〇
心	三三	
不明及否定	三〇	
不明及否定	一七	
不明及否定	一〇	
不明及否定	一七	
不明及否定	一五	
不明及否定	三〇	
不明及否定	二二	
不明及否定	一四	
不明及否定	一七	
不明及否定	二八	
不明及否定	一〇	
不明及否定	九	
不明及否定	一〇	
不明及否定	一九	
不明及否定	一四	

此の表によりて、男女が如何なる傾向を現はせるかを考察するに、女子は明に情緒的解釋に傾き易く、男子は知力的解釋に傾き易きものゝ如し。茲を以て情緒的肯定を主とする、不可解のものゝ部に於ては、概して女子は高歩を占め、之に反して知力的満足の主とする、心又は良心なる解釋に於ては、一般に男子の優越を認め得るなり。且又斷片的考察雜の部に於ても、女子の高歩を占むるは、女子の情緒的肯定に秀で、知

力的統一に薄弱なる傾向を是認して、初めて此れを説明し得る事に屬す。

更に論を進めて、然らば此の靈魂は吾人の肉體と共に滅亡するものなりや、將た又未來永劫に不滅のものなるかを考察せんと欲す。兒童期に於ては、其の不滅を信するものは其二割七分に過ぎずして、其の滅亡を信するものは三割六分の多數に上り。其全く滅不滅の判斷を與ふる事能はざるものは三割五分の優位を占むる旨を論斷せり。然るに覺醒後に於ける青年は、著しく其の不滅の歩合を増して、不明の歩合を減せり。即ち不滅に於て五割二分の優勢を示し滅に於て三割二分、不明に於て一割七分の歩合を示せり。今此れが詳細を示せば

内容	年齢	
	男	女
不滅	十三	五〇
	十四	五〇
	十五	四〇
	十六	四六
	十七	五二
	十八	六五
	平均	五〇
	滅	三三
	不明	一七
	不明	一〇
不明	一七	
不明	一五	
不明	三〇	
不明	二二	
不明	一四	
不明	一七	
不明	二八	
不明	一〇	
不明	九	
不明	一〇	
不明	一九	
不明	一四	

の如く、其の數字の年齢的分布を見れば、明に年齢の進むと同時に滅亡信者の數を減じ、此れと反對に不滅信者の數を増す傾向を明に認め得べし。されば此れよりし

て、靈魂不滅の信仰は、年齢と共に其數を増すものと斷言し得べく、滅の唯物的信仰は、漸次其勢力を減するものと斷言し得べし。

然らば其の靈の不滅を信するものにおいて、肉體の滅亡後其靈は何處に行くべきか。此れ次に研究すべき問題なりとす。幼兒にありては單に死體の行衛を以て此れを説明し、御寺又は御墓となし、兒童前期にては非常に想像的の要素を加へて、空想的詩的となり、更に兒童後期に至りては、神佛との關係を附して宗教的となる傾向ありしなり。然るに覺醒後に於ては、此の傾向益明にして、宗教的説明を用ひざるものは却つて稀なりとす。就中其の最も多き説明は、天國又は極樂に關連せしむるものにして、全數の四割三分に達す。例へば、死んだ人の靈は極樂に引きます、天國に昇ります、よい事をした人の靈は極樂に行き、悪い事をした人の靈は地獄に行きますの如き此れなり。而して此れに次ぐものは、輪廻の思想にして、全數の一割三分を占め、靈は轉々生物又は人類を輪廻するものとなす。例へば、死んだ人の靈は又或人に生れて來るのであります、再び人の體に入り子供となつて生れて來ます、動物等に宿ります等は、此の例なり。更に又宇宙に瀰漫するものとなすもの、其の一割二分を占め、

身體を脱すると共に宙に迷ふものなりとなす。而して其また七分は、神佛に合體し、遂に神佛に歸して其大威力を發揮し、吾人々類を保護するものとなす。其他のものは、(二割五分)に至りては、不滅を信じて而も其の詳細を説明する事能はず。以上の思想は何より導かれしか。余は此れを以て青年の創造にあらずして、教育廣義の產物なりと斷定するを憚らざるなり。其理由如何。第一に此の天國又は地獄極樂說、輪廻說及び神佛化身說は、一般社會に流布せる思想にして、亦古老僧侶、牧師等の口にし、又一般俗人にも此の種の質問に遇ひたる時に常に答ふる所なり。第二には此等の思想は其の是非善惡は實驗以て此れを證する能はず、論理以て此れを破る能はず、さばとてまた此れを信せざる能はざる超科學的超論理的の實在なり。従つて知力的覺醒を経たる青年と雖も、全然此れを否認する理由を見出す事能はず、又反對に肯定する論據を見出す事能はず。遂に此れを知力的對象の外に置かんとするに至る。第三にはホルルの言の如く青年の精神の三分の二は感情的根柢を有すとせば、此の感情の満足不満足は、以て青年の全精神界を支配するに足るの勢力を有するや論なし。茲に於てか、知力的満足を得ざりし彼等は、此處に感情的の満足を得んが爲に、何

等の理由を提示する事なくして如上の説を肯定せんとするは自然の結果と稱するを得んか。斯く考察し來れば、青年が超論理的の如上の説に感情的肯定即ち信仰を與ふるは決して珍とするに足らず。況んや其の記載を見れば、一も科學的論理的、將たまた想像的の説明形式をとらずして、全く信仰的記載の形式を採れるものあるに於てをや。

以上調査の結果を概括して考察すれば、覺醒後の青年は、靈魂の有無、正體及び滅不滅、進んでは其の行衛につきては兒童期の物質的空想的將た又非反省的の説明とは大に其趣を異にし、著しく反省的自覺的の説明を加へ、遂に説明の根本原理を我心に於て求めんとするもの、如し、且又其靈の行衛を説明するや、此處に善惡の報償を豫想して、或は輪廻を信じ、或は地獄極樂説に傾き、或は神佛化身説を採れるもの、如し。茲に於てか彼等の善惡とは如何なる事を意味するか。其應報を支配するものは誰なるかを調査するは、頗る肝要なる事項に屬す。

然らば彼等の善惡の標準とするものは何か。兒童期にありては此れを説明し得ざるもの四割二分の多數を占めたるも、其よく此れを説明したるものにつき考察す

れば、兒童前期までは全く作法的にして外面的に一善行を以て全部を蔽へるもの多かりしが、兒童後期に進めば初めて動機的の説明を加へ、著しく反省的の要素を増したりしなり。然るに本期に入りては、彼等の概括抽象力の發達は、著しく善惡の根本的解釋を試みんとするもの、如く、兒童期の特性たる斷片的解釋を尙固執するもの三割八分に對して、原則的説明を試むるもの五割一分の多數に昇れり。而して其の斷片的解釋に至りては、別に此れを説述するの要なければども、其原則的説明は、本期の特徴とする所なれば多少此れを詳述する必要を感ずるなり。

此の原則的説明にも其の動機に重きを置く良心的説明をなすもの其一割八分を數へ、之に反して巧利的に社會公衆の福利増進を主とするもの一割五分に達し、更に道徳律の遵奉即ち義務の履行を主とするものは一割八分に達す。而して此等は概して年齢と共に益々其の歩合を増す傾向顯著なるを以て見れば、此の原則的説明は實に彼等の向はんと欲する針路なるが如し。即ち

内容	年齢	男	女
斷片	十三	五七	五〇
	十四	三五	四三
的	十五	五〇	四三
	十六	三〇	四〇
的	十七	二四	二五
	十八	二四	二五
平均		三七	三八

不 明	一七	二〇	一七	一五	一五	一七	一五	一〇	四	一〇	〇	一	二
的則原	八	一〇	二五	一〇	一五	一六	一五	一六	二〇	二〇	二八	一	一
道徳律	八	一〇	二五	一〇	一五	一七	二五	一五	二〇	二〇	二八	一	一
社會公共的	九	一〇	一五	一七	一〇	一七	二五	二〇	二八	二五	二五	一八	一八

の如し。然らば其の善惡に對して如何なる應報あるか。又應報なきか。其の應報を否定するものは僅に二分に過ぎず。然も此れ弱年の男子に現はれたるものにして、兒童期の四分に比して減せり。而して又此の應報に對して全く意識せざるものは一割五分に達し、兒童の三割二分に對して又半減の奇象を呈す。兎に角此の應報につきて全く注意せざるもの、又は全く否定するものは、全數の一割七分を越えず。此れによりて考ふれば彼等の大多數は應報を肯定し、且又兒童期に比すれば其應報を信する事尙一層深甚なるもの、如し。茲に於て彼等は何等かの形式に於て應報を信するものと概論するも、大過なきに似たり。然らば此の應報を支配するものは誰か。これを兒童のそれと比較すれば次の如し。

別事項	人	問	自	然	良	心	神	佛	否	定	不	明
兒童%	二六	六	一八	六	一八	一	二九	四一	二	四	三三	二
青年(覺醒後)	六	一八	一八	一	四一	二	四	一五	三三	二	二	一五

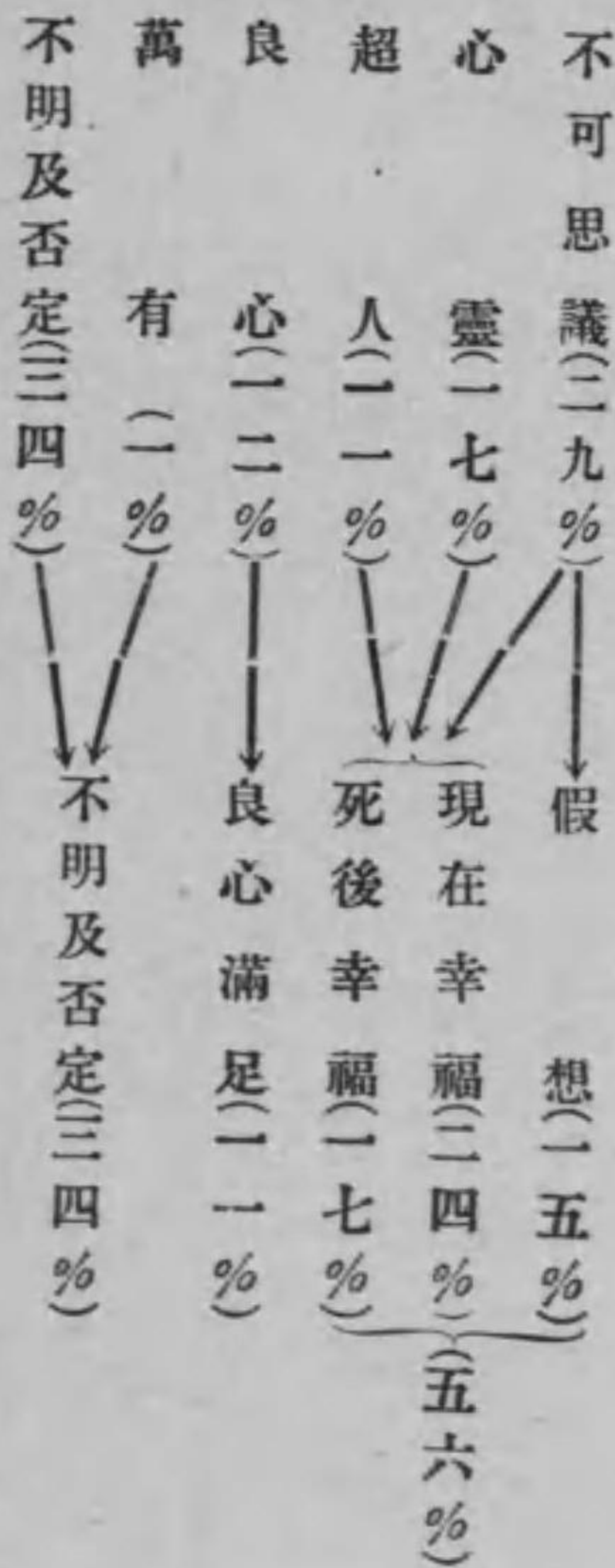
此れによりて見れば、青年の應報を司るものは神佛若くは良心自然にして、兒童のそれは神佛及人間なり。然るに兒童の神佛は多く人體を有し、且此れより稍勝れたるものなりとせるに反し、青年の神佛は、心靈、良心若くは超人、萬有なりしなり。此處を以て、兒童の應報者は人間を以て代表し、青年の應報者は心靈又は良心を以て概約し得べし。斯く觀じ來れば、彼の應報は、主として、人爲的にして、此れの應報は、精神的、自我的なりと解するも、大過なかるべし。

然らば其の應報は如何なる手段によりて行はるゝか。今善報に對して極樂あり、惡報に對して地獄ありとせば、其地獄極樂は如何なる事を意味するか。此れ次に起るべき問題なりとす。

兒童期に於ては其極樂を解するや、現在の肉感的の特性を有せしなり。而して其

現在の肉感的も彼等の神とするもの、充足せられたる境遇を指示するに過ぎざりしなり。而して青年期に入りても、其の極樂と神との關係は、亦此の範疇を脱せずして、彼は此れの因たり、此れは彼れの果たるが如き觀なき能はず。試に今二者を對照して示さんか。其間に質の上の相似あるは勿論、量の上に於ても殆んど相符合するものあるもの、如し。此處を以て見れば、二者の間の因果關係は到底此れを否認すること能はず。即ち

神 極樂の境遇



の如し。更に此極樂の境遇は年齢によりて調査すれば又如何にも神の正體との

相符合するものあるを發見するなり。

内容	年齢	
	男	女
現世の心	十三 八	十三 九
	十四 七	十四 一〇
世的幸福	十五 九	十五 七
	十六 一三	十六 一七
假想的幸福	十七 一五	十七 一六
	十八 一四	十八 一四
來世的幸福	平均 一	平均 一
	平均 一	平均 一
否定及不明	平均 一	平均 一
	平均 一	平均 一

此の神と極樂との觀念の因果をなす理由は、前章に於て既に明に論述せる所なれば、此處に再び繰返すの必要なるべし。然も此の極樂は、神なる目的の充足せられたる結果なり。然らば之に反して充足せられざる結果如何。此れ即ち所謂地獄と稱するものなり。然らば此の地獄と極樂とは相反對せる兩方面をなすものにして其性質を異にするものにあらざる事は容易に推測せらるゝ所なり。而して其の統計の結果は、全くこれを實證するに外ならざれば、其の統計の結果は此れを省略せんとす。

以上の研究の結果より考ふれば、覺醒後の青年は、死を解する事著しく精神的靈的に、其靈魂を解すること亦精神的にして、其過半数は、其不滅を信じ、益々其歩合を増さんとするの傾向を有し、而も其の不滅を信するや、殆んど教育的の影響によるもの多し。而して其善惡を判するや、全く倫理的にして、殆んど既成の宗教的態度をとらず。更に其の善惡の應報に對しては、全く精神的自我的態度をとれり。茲を以て見れば、此等青年に至りて初めて靈的生活の對稱となり得べきものなりといふを得べし。されば兒童の行爲行動の責任者は、精神にあらずして此身此者たりしに反し、青年に於ては其の行爲行動の責任者は精神其者となりしなり。こゝに至りて、兒童期に萌芽として存在し、未だ全く活動せざりし精神即ち心靈は、初めて其の呱呱の聲を擧げ、精神的心靈的教育に眞の可能性を賦與し得るものと斷言し得べし。斯く觀じ來れば、兒童期の現實的肉感的巧利的態度は、青年に至りて全く理想的精神的倫理的態度に變成せる事は、到底否定すべからざるに至れり。即ち此處に於て、死を説き、靈を説き、理想を示し、將た又倫理道德の根柢を啓培するの門に達せるものといふを得べきか。而も其の教育境遇の影響を離れては、其の發展頗る疑はしきは、頗る注意すべき

事項に屬す。

第四 青年期宗教的信仰の特徴

新生—諸能力の勃發—平衡状態の攪亂—内的精神的生活の開始—宗教意識の動亂—内的生活の活動—信仰的教育の可能

前章に於て兒童期の宗教は全く非反省的にして、且又外面的なる所以を論述せり。而して其因て來る根源を尋ねて、人類少年時代の傾向、即ち具體的經驗の蓄積を反覆實現し、經驗を統一整理する事能はざるによる由を論定せり。然るに青年期に入るとは、此傾向頓に一變して、此處に心身の構造に一大革命を來して、所謂新生(New birth)を得著しく内的生活に向つて歩を進むるに至りしなり。此處に於てスターバツクもこの意味にて

“Back of the whole adolescent development, and central in it, is the birth of a new and larger spiritual consciousness”. (Starbuck.—The Psychology of Religion, P. 252.)

と言ふに至りしならんか。

抑も幼兒の其生を初むるや、自他の意識なくして出發し、彼の手彼の足と雖も、此れ

を物體として意識し、決して彼の一部分として意識せず。漸く二三歳に至りて、初めて「我なる代名詞を使用して此處に稍自我意識の新芽を萌さんとする傾向を現はせり。然れども此の「自我」は、全く感官を通じて來る感覺の復合に過ぎずして、大部分は生理的機械的作用に屬す。従て彼等の意識は全く外面的反射的の特徵を有するは理の當に然るべき事に屬す。然るに青年期に入れば、此處に心身に一大革命を來して、全く其の組織構造を一變し、此處に所謂新生を初むるに至り、人類の比較的最近に得たる特性は續々反覆實現せられんとし、從來の平衡は破れ、從來の錨鎖は切れ、遂に彼等は茫洋たる大海に放出せられて、此處に初めて前途の危難を自覺し、外界の依據すべからざるを悟り、遂に我の前途を照し、我の方向を示すものは理性の羅針盤たり、我を進め我を實現せしむるものは、情意の蒸氣力たる所以と覺りて、此處に兒童期の外面的注意は全く内面的に轉向せらるゝに至らんとす。スタンレー、ホールは此れを簡叙して次の如く言へり。

“Adolescence is a new birth, for the higher and more completely human traits are now born.

The qualities of body and soul that now emerge are far newer. The child comes from and horks

back to a remoter past; the adolescent is neo-atavistic, and in him the later acquisitions of the race slowly become prepotent. Development is less gradual and more saltatory, suggestive of some ancient period of storm and stress when old moorings were broken and a higher level attained.” (Hall.—Adolescence, Vol. I, preface, XIII).

以上の如くなれば、青年の新生と共に、兒童期に於ける具體的經驗の蓄積、非批判的智識の吸收、矛盾衝突の樂觀状態は、破れて、經驗には統一を要求し、智識には批判を加へ、矛盾衝突の刺戟は各方面の覺醒を強制し、此處に熱烈なる煩悶苦惱を生じ、深刻なる懷疑に陥り、時に驟雨を來し、時に暴風を起し、動亂騷擾端睨すべからざるものあらんとす。スターバツクは此處を以て次の如く言へり。

“If we stop to glance at the various directions in which the religion of youth tends to develop, adolescence will appear at best to be a very complex affair. We have seen that if we take a cross-section of the composite life of a large number of people at any year during adolescence, it has great diversity of colouring; there seem to be forces interplaying, apposing and conspiring within any one year. If we attempt to follow these forces through successive years, there is distinct continuity, although at

the same time great variety in the lines of development." (Starbuck:—The Psychology of Religion P. 251).

此の動搖擾亂の中に、彼等は經驗思索の擴張に伴ひ、或は教育の影響により、或は微妙なる靈感等によりて、自發的信仰を惹起し、此處に内面的心靈の神を確立して、彼等の君主的權威を認め、彼等の能力として、此處に道徳上宗教上に於て不可侵の法則を設定し、此れに服従するや全く自覺的なり。此處に於て現人的なる兒童期の神は、變じて心靈的即ち精神的となり。而して又其の善惡を解するや、兒童期に於ける作法的外面的は變じて全く内面的精神的となり、其の應報に對しては一面には現在の巧利的にして、兒童期の特徴に酷似する所あるも、彼の肉感的に對し此の精神的なるは大に其の趣を異にする所なりとす。更に他面に於ては、靈の不滅を信じて輪廻轉住を信じ、神佛に化し、又は地獄極樂に於て其生前の果を受くるものなりとす。されば覺醒後の宗教は全く内面的心靈的となり、此れを現在に、また未來に、向上發展せしめんとする努力は禁せんと欲するも能はざるものあらんとす。茲に於て信仰を覺醒し、靈を説き、未來を説き、應報を假定し、献身的犠牲的の修養を強制し、此等の熱烈な

る力を利用して、吾人終極の目的に驅逐するの可能を立證せしめ得るなり。

斯く觀じ來れば、兒童期の信仰的教育にして、若し可能なるものありとせば、單に、外面的規制的境遇的の無意的服従若くは模倣たるべく、青年期にして、若し信仰的教育の可能たるものありとせば、開發舒長以て、自發的覺醒を促成し、枝葉を拂ひ、荆棘を除き、其防礙を除去し、廓清するものたらざるべからず。

第六節 信仰的陶冶の着眼點

青年の三危期に對する心身の順當的發展——如在の感——自然の妙趣——自然の愛好——自然法則の恒常——命數の感——生物生存の法則——生物の浮沈——人類生活の歴史的法則——人類の榮枯盛衰——人力の微弱——偉人の信仰的事實と奇蹟——情趣的培養——文學の妙趣——古文學——詩歌——偉人豪傑に關する歌謠——音樂の妙趣——洋樂——琵琶等——神樂——讀經——祭祀儀禮の莊嚴——反省的思索——默念懺悔——人格的感化——教訓——態度等

以上の各節によりて、青年の宗教意識の發展を分解的に研究して、遂に其の特徴を抽象するに至れり。而して其の各節の研究に當りて得たる結果は、成る可く此れを

教育上に應用せんと努めたり。然れども其の個々の場合の記載は全體に通ずる事能はず、其要を摘むこと能はず、此處に於て最後に其の足らざるを補ひ、纏むべきは纏めて、信仰的教養上の着眼點を示さんと企圖せり。固より上來の各項を網羅する事は到底不可能の事なれば、單に其の大要を約して其の向はんとする方向を指示せんとするに過ぎず。されば本節は如上の瞥見より來りし大體論にして、本研究の結果より來りし結論にあらざる事を告白せんとす。

井上博士は哲學雜誌に於て、宗教の將來如何(明治三十二年十二月)倫理と宗教との異同如何(明治三十六年七月)なる論文によりて、實在觀念の養成を提議せられ、更に之れを詳説して、倫理的實在觀念の附與を以て倫理教育の極意なりと論せらる。即ち單に忠君愛國孝悌友愛の徳目を外面的に教授せるものにては、眞に倫理教訓の實效を擧ぐる所以にあらざれば、先づ其の胸中に倫理的實在の觀念、換言すれば其の徳目の精神を形成して、其教への精神となし、氣概となし、氣力となし、理想とせざるべからずと論し。而して其の精神はやがて或一種の宗教なれば、此處に宗教的陶冶の必要なる所以を斷定せられたり。次で谷本博士は、更に別途の見地より宗教々育の必要

を論せられ、明治三十九年十一月發行新教育講義、其の實行問題として、第一に氣質體質の變更、第二に天然自然の愛好、第三に歴史上の榮枯盛衰、第四に美術獎勵、第五に祈禱懺悔の詳細を説かれ、以て兒童青年に一種の信仰を與へ、これによりて強力なる原動力を發揮せしめんとせらる。此れ我邦に於て宗門宗派に拘はらずして、兒童生徒に提供せられたる宗教々育法の嚆矢ならんか。

偕青年の自覺覺醒及煩悶懷疑の如上の研究結果より、信仰的陶冶に對し如何なる着眼をなすべきか。第一に自覺覺醒は青年の春機發動及腦纖維の發達と密接なる關係を有す。於之余は先づ第一に春情發動期に於ける心身の順當的發達に着眼せざるべからざる事を主張せんと欲す。而し本期に於て其の順當的發達に最も大なる關係あるものを筋肉とす。スタンレーホールは筋肉の職能を論じて曰く

「筋は其重量に於て約男子身體の四十三パーセントを占め、大人の包有する勢力の凡そ五分の一を消費す。隨意筋に對する腦皮質は、大腦の大部分に擴布せるを以て、筋の發達は同時に腦の構造を完成せしむる結果を生ずべし。又筋肉は消化作用に對して頗る重要な關係を有する所より、或意味に於てはこれを消化の機關

と云ふを得べし。筋は又最も密接特殊なる意味に於て、意志の機關たり。彼等はあらゆる道路を開鑿し、市街を建設し、機關を創造し、又あらゆる書籍を著し、文字を寫し、其他吾人の物質に關する事一として彼の力によらざるものなし。若し筋にして發達せざらんか、或は其の作用遲鈍ならんか、意志と實行との間に大罅隙を生ずるに至るべし。或意味より云へば、性格も亦筋的習慣の複合物として定義せざるべからざるに至らん。マシュー・アーノルドに從へば、吾人の生活の四分の三は行動たり。シヨペンハウエルに從へば、吾人は三分の一の知力と三分の二の意志より成る。ロバートソンに從へば、吾人は動作する以外のものにあらず換言すれば、吾人は動作の總計なり。モーヅレーによれば、性格とは單に筋肉の習慣に過ぎざるものとなるなり。(Adolescence. Vol. 1.P. 131)

と論じ。吾人の筋組織の如何に吾人の身心發達と活動とに重大なる關係あるかを示し、以て筋組織の修練の等閑に附すべからざるを極論せり。更に氏は論を進めて、筋は意志の機關たるのみならず、實に又思考感情の機關たる所以を明にし、青年教育の骨子たる結論を導きて曰く

「近世心理學の説く所によれば、筋は實に精神一切の外發的過程の表出機關にして、注意の變化其他あらゆる精神状態の變化は、何れも無意識的に筋に影響し、筋は其都度極めて巧妙に其緊張を變じて、これに應ずるものなり。故に筋は常に意志の機關たるのみにあらずして、實に又思考感情の機關なり。……：されば筋は慣熟模倣、服従、品性及び態度習慣の乘輿たり。茲を以て、青年に對しては、筋的、教育は、根本的のものたると共に、此の要素を缺く、教育は、不完全のものたるを免れず。熟練忍耐持久の如きは、何れも筋的徳性とも云ふべきものにして、疲労多情、輕浮、意氣銷沈、不注意、自制及自奮心の缺乏等は、之れに對して筋的過失ともいふべきものなり。」(Adolescence. Vol. 1.P. 132.)

と論じ、以て青年教育の根柢たる意義を明にせり。余も亦兒童青年の身心の順當的發達の大部分は、筋的發達の如何に關係するものなりと斷ずるに躊躇せざるものなり。こゝに於て余は青年身心の順當的發達を企圖せんには、筋的組織の順當的發達に注目するを以て其要訣を得たるものと斷じ、進んで筋的組織の順當的修練を考究せんとす。スタンレー、ホールは、此の方法を尋究して第一實業教育、第二手工教育、

第三體育術第四遊戯運動競技を擧げ、殊に第四の遊戯につきては、其の詳細を悉せり。
(Adolescence Vol. I.P. 170—266 参照)。谷本博士は此等諸種の事項中殊に冷水浴と深呼吸とを推奨せられ、以て青年の氣質體質の變換を主張せられたり(新教育講義五二二頁)。如上の説は何れも本問題の解決には根柢的條件たるを失はず。又何人も此れと全く異なる方法を以て此れを解決し得べしとは思惟せざるなり。然れども、余は青年の煩悶苦惱を減し、其懷疑を調整する上につきては、特に意力を強め、外界に支配せられずして外界を支配せんとする信念を旺盛にせんとする見地よりして、抵抗遊戯(フットボール、ベースボール等より相撲、擊劍、柔術、狩獵より乗馬等に至るまでを含む)冷水浴、游泳より、諸種の脚部運動、登山、疾走、跳躍、滑走等を含む等を特に推奨せんと欲す。思ふに強力迅速なる意志的反動は、單に靜平なる知力的判斷、即ち知力的測定のみにては、到底其完成を期する事能はず。必ずや彼等の活動に強盛なる力を與ふる信仰に依頼せざるべからず。知力的の測定は、彼等を先づ第一に時間的にこれを制限す、從て咄嗟の判斷はよく彼の爲し得る所にあらず。第二には經驗的にこれを制限す、從て未知の事實を含む場合は、判斷するを得ず。然も時間的經驗的の制限は、吾人の

生活の過半を占め、全く同一の事を繰返すは殆んど稀なりと言はざるべからず。從つて、斯くあるべしとの情意的信仰、即ち筋肉的習慣は、吾人の實際的生活の指針たるべく、其れを練熟して機宜に適せしむるは、實に彼等の煩悶疑惑を緩和する一有力手段ならずんばあらず。抵抗遊戯のこの修練に適するのは、余の喋々するを要せざる所なるも、冷水浴、游泳につきては多少の疑惑を免れざるべし。然れども其の此れに利益あるは、ホール並に谷本博士の詳論せる所なれば、此處に之を贅するの要なかるべし。(Adolescence, Vol. I.P. 225—226. 並に新教育講義五一—五二—五三—五四頁参照)

斯くして春情發動期に於ける心身の發達を調整し得たりとせば、吾人は次に如何なる事に着眼すべきか。ゼームス博士の所謂宗教の第一經驗たるセンス、オブ、レア
リチー(谷本博士は如在の感と譯せらる)を養はんとするものなり。然らば此の如在の感とは如何。吾人の經驗は此れを實證する事能はず、又科學は此れを説明する事能はず。知力は此れを肯定する能はざるに、然も吾人の情意は、或實在の存在を承認するの感じなり。所謂西行法師の伊勢大廟に參拜して

何事のおはしますか、は知らねども

ありがたなさに涙こぼるゝ

といふ感じは、正に此の如在の感の發表たらずんばあらず。吾人は神鬼の實在を證明する能はず、然も危難に遇ひ又は僥倖を得るや、何物か吾人に或一種の威力を加ふるものあるを感ずるなり。青年にても此宗教的第一經驗を感得せるもの少なからず。然れども未だ其の信念鞏固なりとは言ふ能はざるなり。然らば何を以て此の情意の養成に資せんか。余は第一に自然の妙趣を感得せしめんと欲す。自然の妙趣は何によりて此れを感得せしめんか。自然に親しみ、天地の高大を見て其の壯絶を感得せしめ、萬象の微を穿ちて其の精に驚嘆せしめ、其運行流轉を見ては其恒常不變を嘆稱せしめ、萬象の微を穿ちて其の精に驚嘆せしめ、其運行流轉を見ては其恒常不變を嘆稱せしめ、或一種の如在の感を肝銘せしむるを得るや必せり。されば吾人は努めて青年を導きて名山大川に遊ばしめ、靈地靈廟に參拜せしめ、深山幽谷に將た亦茫洋たる大洋に遊行せしめ、進んでは天象地底、或は空界の微を穿ち、細を究めしめ、かくして自然を愛好せしむると共に、自然法則の微妙恒常を感得せしむるに全力を盡さざるべからざるなり。彼の神社佛閣の幽邃にして神々しく、以て世俗の邪正

を洗淨するに適する靈地を選び、又は壯絶にして天地を達觀して、俗塵を拂ふに適する勝地を選びしも、蓋し偶然にあらざるなり。

更に進んで余は宗教的第二の經驗として命數の感を養はんと欲するものなり。此れを養ふの方法如何、生物及人類の生活法則を知らしむるに若くはなし。夫れ宇宙開闢以來、生物の生滅するものそれ幾何ぞ。然れども彼等は一定の法則によりて生存し、一定の法則の下に死滅し、一定の法則の下に進化す。蜂には蜂の天職あり、犬には犬の職能あり。馬は如何にしても人の運命を擔ふこと能はず。蠢々たる昆蟲、潑潑たる魚介、一として各其命運を左右する事能はざるなり。これを生物の歴史に徴せんか、古代石炭紀に於て地殻の一半を覆ひし木賊羊齒も、今は單に矮生の殘骸を地表に横ふるのみにして、亦昔日の繁榮を見ず。近くは近世紀の始め、西比利亞にまで擴がりし巨象も、今は其餘生を印度亞弗利加の熱帯に留むるに過ぎず。而して僅に第三紀の終りに於て其の發祥を刻せる人類は、今や將に地表を征服し占領せんとするの優勝を保てり。生物の運命に翻弄せられ、其の天地の間に浮沈する、實に斯の如し。更に眼を轉じて人類の歴史を觀察せしめ、其の導ける法則を會得せしめん

か、此の生物の興起滅亡と少しも其の性質を異にせず、只比較的小規模に實演せらるるのみなるに驚かん。されば吾人の命數を最も具體的に畫ける、此の人物の榮枯盛衰を觀察せしめ、人力の微弱を感悟せしむるを得ば、誰か如在の感を起し、命運の究まる所を察し、其一時の毀譽得喪も、善者は榮へ、惡者は衰へる所以を達觀せば、笑つて此れを看過するを得べし。一時の失敗轉蹶も時なり運なりと諦らめ、最終の勝利は至誠神に通ずるの至情にある事を信念すれば、煩悶懷疑も四散するに庶幾からん。生物の浮沈人類の榮枯盛衰を感得せしめ、依つて以て青年の煩悶苦惱を緩和するには、正に生物學及歴史の事實に俟たざるべからざるなり。更に此の事實を反面より具體的に直觀せしむるは、偉人の信仰的事實と其の奇蹟なり。偉人の大事を決行するや、必ずや或一種の信仰を持ち、これを確保するや實に忠實を極む。此の信仰によりて危急に臨みて動せず、騒がず、苦悶せず、疑はず、以て其大業を成就す。コロンパスは地球の球形なる信仰と、基督の加護とを信じて、晨夜の祈禱を缺かず、遂に千古の大發見を完遂し、ネルソンのトラファルガルに戦はんとするや、熱誠の祈念を上帝に捧げて、其の加護を信じ、其の大膽不敵の行動遂に敵艦を粉碎し、元寇の侵入するや、我國上

下の將士神明の加護を信じて、其の降伏を免れ、那須與一の扇的に向ふや、神明を默念する事少時にして、其心氣を静めて、其の芳名を百世に残し、加藤清正の敵に對するや、南無妙法蓮華經の旗を翳して、其加護を信じて、敵膽を寒からしむ。擧げ來り數へ來れば、到底筆紙の盡す所にあらざるなり。此の事實と奇蹟とを青年に感得せしむるは、實に彼等發達の危期に於ける中流の樞柱たらすんばあらず。

更に進んで如上の信仰は、亦情操的の培養を要する事を主張せんと欲す。而して其の肥料の最たるものは、文學の妙趣なり。これを遠くしては、支那古聖の大文字に接し、又は孔孟老墨の精氣に觸るれば、誰か一種の信仰を感得せざらん。茲を以て孔孟を研究するもの、孔孟に一種の如在を見、老墨を読むもの、老墨の精神を靈化し、彼等に一種の氣あり、魄あり、神ありとして、此れを信せざるものなく。希羅の聖典を研究するもの、亦此處に一種の信仰を設定せざるものなし。これを我邦にしては、山鹿素行を読み、頼山陽を繙くもの、誰か一種の信念を感得せざるものあらん。此の點に於て、余は現今中學高等女學校に於て、斷片的の美文を集め、支離滅裂の論叢を輯して、教科書となし、此れを金科玉條として、演繹これ努めしめんとする國語漢文讀本を排す

るものなり。斯くの如き一貫の主義なき精神なき無味乾燥の文字より如何なる感化を與へ得べきか如何なる信念を賦與し得べきか。若し青年にして感奮事に當り興味此れを誘ふにあらざれば到底其の成功を期し難しとせば、現今の國語漢文讀本は正に不成功を豫期せるものなりと言はざるべからず。余は切に首尾一貫大精神の彷彿たる大文字によりて、青年の志氣を鼓舞し、肉躍り、骨鳴るの信念を解發し、此れによりて至難の文字文章を打込むにあらざれば、到底成功を期すべからず。況んや、現今青年の意氣銷沈し、氣力衰へ、煩悶懷疑一大革命の時期あらずんば彼等を精神的に死滅せしめんとする時期に於てをや。余は切に一種の精神によりて一貫せられ、精氣の潑瀾たる大文字によりて、彼等に臨まん事を希ふものなり。更に青年の情操的陶冶に大なる肥料となるものは、詩歌及偉人傑士の歌謠等なり。其簡潔にして含蓄多く、精氣の横溢するものありて而も盡くる所を知らず。其根柢には一種の氣魄の横はるものありて、之を口唱すれば一種のインスピレーションを感じて、我心の煩悶苦惱を去り、懷疑を解くものあるが如し。此立場よりの教科書を見れば、古今の妙趣傑作集りて自ら青年の心弦を弄ぶものあるものゝ如し。若し現今我邦の教科書

にして、直に此處に飛躍する事能はずんば余は和漢の傑作を特に増加せん事を望むものなり。

次に青年の情操的培养に利あるは、音樂の妙趣なり。洋の東西を問はず、宗教と密接不離の關係を結べるものは音樂なり。誰か教會に行きて讚美歌を唱和して無記無關心たるものあらん。邪心を懐けるものは此れによりて戰慄する事、恰もゲーテのファウスト中に於ける、マーガレットの教會に於ける悶絶懺悔に彷彿たらざるものあらん。其信仰を得ざるものも、誰かこれに其の靈を奪はれざるものあらん。さては琵琶、淨瑠璃の類に於ても、如何に將士を感動せしめ、庶人を泣かしめ、青年子弟の血を湧かしめたるか。近くは飛行家武石皓坡の男山八幡の護符たる白矢を挾んで、深草の露と消へし刹那を聞きては誰か感動せざるものあらん。青年の情操を培養し、其の信仰に向つて熱烈を加ふる誰かこれを否定するものあらん。神殿に於ける神樂佛寺に於ける讀經、詠歌、吾人の知力は時としてこれを探るに足らざるものとして嘲笑することあらんも、而も吾人の情緒は此れを肯定して、一種云ふべからざる靈妙なる感じと共に、有難味を伴ふを感ずべし。然らばとて吾人は勿論學校に於て此

等を行はざるべからずと斷するものにあらず。要は此れを是認して可成青年の接近を勸奨せん事を望むものなり。祭祀儀禮の莊嚴につきては、兒童期に於て既に此れを詳論せるを以て、此處に贅言せざるも、其の信仰を感得する上に一つの必要なる手段たることを失はず。

更に青年の煩悶を解き、情操の平靜を保たしむるものは、默念及懺悔なり。青年の煩悶苦惱するや、此れを内に秘して發散せしめざれば、其の煩悶益々進み、益々高まりて、遂に停止する所を知らず。茲を以てこれを發散する事を敢てせざる内氣の青年は、遂に一時的的精神錯亂を起して、不慮の事變を起すものあるは、藤村操の例を引かざるも明ならん。此危期に際して、これを防禦するもの只これ發散せしむるにあるのみ。其の發散に對しては、神に對する默念可なり。青年は自己の過失非行乃至は煩悶の原因を語るを愧づるものなり。されば先づ此れを神の前に露出して其の神赦を乞はしむるも其の一方方法たらずんばあらず。然れども強烈なる煩悶懷疑に至りては、信仰心の弱き青年に於ては到底默念を以て此れを解決し得べきものにあらず。茲に於て最も信用せる人に對して懺悔せしめ、此れを慰藉するに若くはなし。煩悶

は多くは茫漠たる情緒に其の根柢を据うるものなり。従つて此れを聞くも、到底適確の方案の湧出するものにあらず。然れども懺悔するもの之を發表すれば、既に其の煩悶の大半を散すると共に、聞くもの此れに慰藉の言を與へて、其の熱を冷せば、多くは消滅するものたらずんばあらず。此れ吾人の其の特効を信じて、此れを青年に勸奨せんとする所以なり。

最後に信念養成に重要なものは、信念の堅固なる人の人格的教訓感化なり。教訓感化の効力は、人格の如何によりて其の効を異にするは、前既に述べたる所、此處に喋々を要せざる所なり。(第五節第一參照)小中學校等に於ける修身科の偉功を奏せざるは、實に其一半は教師其人の人格信念の不充分なるを意味するものといはざるべからず。殊に感受力の鋭敏なる青年に於て然りとす。茲に於てか余は特に此の人格的教訓感化の必要を唱導するものなるも、然も此れ人による事にして方法の如何による事頗る僅少たらずんばあらず、人を得ずして此れを喋々するは、恰も木によりて魚を求むるの類ならずとせず。近頃同僚佐藤文學士、人格の感化を著して其の根本的の説明を試みらる。余は本節を終るに臨み特に此れを推奨し、委細を氏の説

信仰を基とせる道徳的陶冶の研究
明に譲らんと欲す。

三三〇

信仰を基とせる道徳的陶冶の研究終

大正三年四月十二日印刷
大正三年四月二十日發行

定價金一圓四十錢

著 者
所 有
權 作 者

著 者 田 中 廣 吉

發 行 者 大 倉 廣 三

印 刷 者 荻 原 勝 次 郎

東京市京橋區南橫町十八番地



發 行 所

廣 文 堂 書 店

東京市京橋區南橫町十八番地

電話京橋二四六三
振替東京四六八四

哲學博士 ジェイムス・ピール、ブラット先生原著
文學博士 加藤 玄智 先生 校閱
文學士 岡島 誘 先生 譯述

宗教心理講話

クロース綴 頗美本
正價 金一圓三十錢
送料 金十二錢

宗教に關する著述尠なからざるも未だ人類の宗教信仰 眞意を論じ信念の那邊に存するかを究めたるもの稀なり本書は此缺點を補填せんとして公にせられたるものにて心理學の立場より人間信仰心の本性を探究せんため材を各教の教理教道史及び社會人文の發達、人種の差異、思想の變遷等の史實に求め以て少年期青年期壯年期に於ける宗教信仰心の發現維持および存在を闡明にしかねて宗教界の過去現在の趨勢に論及し宗教の將來に向つて公正穩健なる斷案を下せる者也而も文章の通俗にして平易なると加藤博士の嚴密なる校訂とは内容と相俟ちて光彩陸離たり。

高島平三郎先生著

(好評第二十八版)

賜天覽

兒童心理講話

クロース綴 函入 頗美本
正價 金一圓三十錢
送料 金拾貳錢

教育に關する諸問題は殆ど解決して餘す所無きが如し然るに積年の一大缺陷にして教育界の重要問題たる兒童心身の發達に俱なへる教育法なき事之なり。今や此の要求を充すべき高島先生の一大著書「兒童心理講話」は公にせらる。本書は先生が二十有餘年間の實驗と深遠なる學識とに基き、加ふるに泰西最近の學說を斟酌して説述せられたるもの也。

教育界一大名著

日本一の心理學者……高島先生の兒童心理講話あるを日本……否世界に誇り得べし、何となれば世界に本書の如く深奥なる學說を最も平易に説記せるもの無きが故也。

海老名彈正先生著 好評十五版

人間の価値

クロース綴函入美本
四六判六百餘頁
正價一圓五十錢
送料十二錢

人間の価値は人格の觀念の高潔にして人間の品位を重んずる人物によりて存す。しかれども現下社會は將に背進しつゝあるが如し。海老名先生之を大に遺憾として半生の心血を傾注せられ倫理、道德、宗教、教育、社會の各方面より現代一般人士が取るべき針路を論究せられたるもの即ち本書也。人格の修養に志すの士は勿論光輝ある生涯を送らむとするものは必讀すべき一大名著なり。

早稻田大學講師
法學博士 浮田和民先生著

人格と品位

四六版クロース綴
函入美本
正價金一圓三十錢
送料十二錢

人格の觀念乏しく人間の品位を重んぜざるは現代社會の一大缺陷と謂ふべし、されば人格の修養は方今一般人士の最急要務也。

本書は浮田博士が早稻田大學講師として現在及び過去に通じて數萬の子弟を訓育せらるゝに人格と品位を高尚ならしめんため緊要なる點を倫理、道德、教育、宗教、社會の各方面より説かれたる一大雄篇なり。大方の人士よ乞ふらくは一本を座右に備へられよ。是れ實に一身一家の爲めのみにはあらざるべし。

現代の代表的名著——高評嘖々第十七版

王堂 田中喜一先生著

書齋より街頭に

三 版
金 緑 意 匠 優 美 入
菊 版 五 百 五 十 頁
全 一 冊 金 一 圓 八 十 錢
送 料 十 二 錢

此書は王堂田中先生がその独自の實驗理想主義の立場より現代文明の根本問題に一大鐵案を下せるもの也。

實驗理想主義は輓近歐米思想界を風靡せるプラグマチズムに出で、更らに之を醇化せるもの也。

實驗理想主義は學徒の理想を擁して志士の實行を期するもの也。

實驗理想主義は哲人主義也 頑迷なる權威と輕俳なる革命に反抗するもの也。

哲學は空疎なる談理に没し文藝は頽唐せる享樂に隨して共に人生の歸趣と相關するもののみなる時に當り此書出づ、蓋し偶然ならざる也。

王堂 田中喜一先生著

哲 人 主 義

ク ロ ス 綴 入 美 意 匠 優 美 版 五 百 五 十 頁 金 一 圓 八 十 錢 送 料 十 二 錢

正 價 金 二 圓 十 五 錢

送 料 金 十 二 錢

著者独自の主張たるニューヒロソフヒック、ラ

チカリズム、の見地に立ちて、政治、道德、宗教、

教育、科學、文藝、藝術等に關する諸問題を論じ、

現代の實生活に一大鐵案を下したるもの本書也。

本書の内容を知らんとするものは新聞雜誌及學者の批評を

信せよ……皆曰く、現代の理想を實現せんとして奮闘する

士は我學界に王堂學人あるのみと。

「書齋より街頭に」の姉妹篇

■文學士 樋口龍峽先生著

近代思想の解剖

全一冊 菊本
定價金一圓五十錢
送料 十 二 錢

偽りなき

世評の

一端

本書一度世に出でるや我思想界に一大革命！起り新聞雑誌は本書を

内田魯庵氏曰く……本書は近代思想を形成したる各要素を討尋して居る、例へば唯家屋の屋根や門構や其印象を説くのみで無く根本の基礎や構造や材料の性質まで説及して餘すところがない、如斯く各方面から見ると少しいの間隙なく近代思想の解釋を與へたものは是までに全くない……近時の含著ある快著で近代思想を知るには本書を除いて他にはなからう。近時吉田熊次博士曰く……本書は極めて公平なる敘述を旨とし近代思想の解剖を試みて遺憾なく目的を達して居ると實に本書は時代を知るに唯一の解決者也

近來出色の快著にして混沌たる今の社會には又となき唯一の覺醒劑也と……宜なる哉發表以來未だ淺日にして今や第十九版を要求す

275
59

終

